

フレム・スノープスの捉えがたさ

— フォークナーの『町』論 —

植野達郎

『村』の17年後にスノープス三部作の第二部として刊行された『町』は、評価が分かれる作品である。ヴォルペは失敗作であると断じているが(317)、ノエル・ポークは「素晴らしい出来栄え」(133)であると語っている。評価の分かれる要因の一つは、『町』はフレム・スノープス一家およびスノープス一族について、ギャヴィン・ステイーブンス、ラトリフ、ギャヴィンの甥であるチャールズ・マリソンの語りによって構成されているが、それぞれの語りをどのように受け止めたらよいか明瞭ではないことにある。たとえば、チャールズは冒頭で、「僕が『僕たち』とか『僕たちが考えた』と言うときに意味することはジェファソンであり、ジェファソンが考えたということだ」(3)と自身の語りを規定しているが、12歳であるチャールズがジェファソンの町の人々の考えを代表することの妥当性が問題となろう。チャールズが語ることは、家庭で交わされる会話や、ラトリフとの話が基になっているのだが、それをジェファソンが考えたことと言えるのだろうか。さらにギャヴィンの語りであるが、彼の語りは捉えがたい。というのもギャヴィンが語ることは彼の個人的見解が色濃く出ていて、客観性を欠いているからである。『町』の出来事について述べるのは主としてギャヴィンなので、彼の語りによって物語は進行しているかのようなのである。「読者はギャヴィンをフォークナーの代弁者であると思うかもしれない」(193)とブルックスが述べるほどギャヴィンの語りは説得力を持っている。ギャヴィンが語ることに基本的に賛同しながらも、第三者的な立場を保持しているのがラトリフである。

この三人が語る対象がフレンチマンズ・バンドからジェファソンにやってきたフレム・スノーブスである。『村』で述べられているフレムは、どこからともなくフレンチマンズ・バンドにやってきて、ウィル・ヴァーナーの店で働く傍ら、村人たちに高利で金を貸し付けるとともに、マッキヤランの子供を妊娠したユーラと結婚し、新婚旅行から娘リンダとともに帰ってきた。そして、誰一人としてほしいとは思わなかった土地を持参金として受け取り、南部の伝説を利用してラトリフらに売りつけたのである。このようにして小金を貯めたフレムがジェファソンにやってきた。

ギャヴィンがフレムについて述べる時、嫌悪感を隠そうとはしない。ギャヴィンが抱いているフレム像は、自分の子供ではない子供を宿したユーラと結婚し、金に関しては厳しく、人情とか義理とは無縁な冷たい人物というものである。ユーラがリンダを孕んだときギャヴィンはまだ学生であり、彼女に好意を抱いていたとしても具体的に力になることはできなかった。そのユーラと結婚したのがフレムである。フレムが何を考えてユーラと結婚したのか、また自分の子供ではないリンダを自分の子供として引き受けたのは何故なのか、ギャヴィンには理解できない。彼に理解できるのは表面に現れたフレムの言動であり、そこから想像するフレムとは金銭のことしか考えない人物というものである。ギャヴィンがフレムに対して抱く嫌悪感がユーラとの結婚に由来するのか、あるいは金銭に対する姿勢から来るのか判然とはしないが、フレムに対して嫌悪感を抱いていることは疑う余地がない。

ギャヴィンにとってもう一つ理解できず、憤懣やるかたないことは、ユーラがマンフレッド・ド・スペインと不義の関係を持ったことである。ユーラはド・スペインとの関係を恥と思うこともなく、町の人々も二人の関係を公然たる秘密として黙認していることに対して、ギャヴィンは忸怩たる思いを抱いている。その思いが舞踏会でド・スペインに対する挑発行為となって現れるのだが、喧嘩のやり方を知らないギャヴィンは血を流すだけに終わる。ユーラとフレム、そしてユーラとド・スペインの関係をどうしたいのかを明らかにすることもできず、また何一つ変えることができない

ギャヴィンは行動の指針を失ってしまう。「今何をしなければいけないのでしょうか、父さん。父さん、何ができるのでしょうか」(99)と嘆いて、行動不能に陥ってしまったギャヴィンは、現実から逃れるかのようにハイデルベルグの大学に向かう。その際に、彼はラトリフにジェファソンとスノープス一族から目を離さないでほしいと頼む。スノープス一族のような危険なものに「対抗し、抵抗するのだ。耐えて、そして（もしできるのであれば）生き延びるのだ」(102)と、悲壮な覚悟でラトリフに後事を託すのである。

ギャヴィンが執拗に説くスノープス一族がジェファソンに及ぼす危害とは一体何なのだろうか。しかも「ジェファソンで『スノープス一族』と言うときはフレム・スノープスということだ」(33)とギャヴィンが述べているように、彼はフレムとスノープス一族とは一体であると見做している。「ジェファソンを覆っているスノープス一族とは森から出てきた蛇や害虫の到来のようなものであり、彼（ラトリフ）とギャヴィン叔父さんだけがその危険と脅威を知っている」(112)とチャールズが述べているように、スノープス一族は、ギャヴィンとラトリフには見えているがジェファソンの町の人々には見えていない危険だというのである。ギャヴィンが危惧するこの危険は、人々の眼には見えないので手をこまねいている間に、取り返しがつかなくなることを懸念してのことであろう。それゆえ、ギャヴィンはそうした危険の種をなんとしてでも排除したいと思うのである。

ギャヴィンがフレムに対して抱く嫌悪感に呼応するかのように、批評家からもフレム批判が繰り返される。ヴォルペは「フレムはフォークナーのキャンノンの最大の罪——人間性が欠けていること、すなわち他の人間の高潔さ、必要性、そして感情を認知したり尊敬することがまったくできないこと——を犯す唯一のスノープスである」(309)と述べている。またブルックスは「フレムは詩情を解することもなければ愛もまったく持ち合わせていない」(181)と指弾している。彼らのフレム批判は具体的な悪を指摘しているのではなく、彼の人間性をめぐるものである。こうしたフレム批判は、フォークナーがヴァージニア大学で、「人間にはスノープスを好まず、スノープスに異議を唱え、必要とあればスノープスが取り返しのつか

ない害を及ぼさないように一步を踏み出す必要がある」(34)と発言したことや、「わたしはフレムを気の毒だとは思っていません。彼は手に入れなければならないとは夢にも思っていなかったものをすべて手にしなければならなかった。たとえば世間体のように」(119)と発言したことが根拠の一つにもなっているのであろう。しかし、非難されるべきフレムの悪とは具体的にどのようなものなのだろうか。

まず確認しておかなければならないことは、フレムとスノープスの意味領域である。ギャヴィンは、ジェファソンではスノープス一族とはフレムのことであると考えているが、スノープス一族の中には、エック・スノープスのように自分の首を折ってまでも他者を救おうとし、挙句の果てに行方が分からなくなった子供を探しているときにガスが爆発して死んでしまう者もいる。だが、エックは「スノープスの人間ではなかった。だから死なねばならなかったのだ」(107)と、スノープス的ではないと決めつけられるのである。このエックの例から考えるとすれば、スノープス的なものとは、他者のためではなく自らの利益を考えて行動することであると、まずは括ることができるだろう。しかし、「スノープス一族については蛇や山猫のように見張りを怠ってはならない」と、ギャヴィンが敵対心を剥き出しにするのは、スノープス的なものには自己の利益を図ることにとどまらないものがあるからであろう。

スノープス的なものの本質とは何なのだろうか。『町』の冒頭数ページに渡って、フレムがフレンチマンズ・バンドに登場してからジェファソンに移るまでのスノープス一族の動きが概観されている。「もう一年経つと、アブはフレンチマンズ・バンドにやってきて息子と暮らし始め、別のスノープスがどこからともなくやってきて借りていた農場を引き継いだ。さらに二年経つと、また別なスノープスがヴァーナーの鍛冶屋の店で鍛冶屋になった。結局フレンチマンズ・バンドにはヴァーナーの一族に劣らない数のスノープスがいることになった」(5)のである。ラトリフによると、「連鎖を断ち切ることなく、フレンチマンズ・バンドのすべてのスノープスが一段ずつ昇り、一番下の段が空くと、別のスノープスがどこからともなく

やってきて、その段を埋めてフレンチマンズ・ベンドを覆ってしまった」(9-10) というのである。このスノープス一族の動きが、少なくともラトリフには危険であると思わせている。フレンチマンズ・ベンドに侵入してくるスノープス一族を蛇、山猫、昆虫など、人間とは異種のものとして形容し、スノープスという異物がある地域を席卷してしまうと、それまでの文化が消えてしまうことが語られている。スノープス一族の一つ一つの出来事を見ると、一つの場所から別の場所への移動でしかないが、その動きを繋ぎ合わせてみると、目には見えない構図が透けて見えるのである。

スノープス一族がそうした構図を意図しているのではあるまい。彼らは今までの状態からより良い状態を求めて動いただけであろう。そうしたスノープス一族の個々の動きがフレンチマンズ・ベンドに及ぼす意味をギャヴィンとラトリフだけが理解しているというのである。しかし、その危険性を具体的に提示できなければ、他の人々の理解を得ることはできない。さらに言えば、危険を及ぼすとギャヴィンが危惧するスノープス一族、そしてその代表であるフレムと、実際のフレムの行動とが合致せず、フレムの行動がギャヴィンの見立てと異なる場合が生じることもある。

その一つがギャヴィンがジェファソンを離れていた間に銀行の副頭取となったフレムが取る行動である。ギャヴィンは第一次世界大戦時にモンゴメリー・ウォード・スノープスをジェファソンから遠ざけるためにフランスへ連れて行った。しかし、モンゴメリー・ウォードは兵隊を相手にフランスの女の子を使った商売を始めるが、ギャヴィンはそれに対して手をこまねいているだけである。ジェファソンに帰ってきてからもモンゴメリー・ウォードはいかがわしい写真をスライドにして町の人に見せて金を稼ぐのである。そのモンゴメリー・ウォードを排除する行動を起こしたのが他ならぬフレムである。フレムは酒密売の罪をでっち上げてモンゴメリー・ウォードをジェファソンから追い出したのである。このフレムの行動からは、ジェファソンの町で存在を許さないと判断した人物に対しては、手段を選ばないという強い意志がうかがえる。さらに、I・Oスノープスの一件もある。列車事故でヘイト夫人の夫とI・Oの驃馬がひき殺されたことに対

して、鉄道会社が夫人に金を支払った。自分の驃馬の取り分を夫人に主張するI・Oに、フレムは驃馬の代金として900ドルを自ら支払い、彼をジェファソンから追い払ったのである。フレムは道徳的、倫理的に許されない行為をする者たちを、罪を捏造したり、身銭を切ってもジェファソンから排除したのである。これらの行動はフレムのジェファソンに対する思いを語っていないだろうか。実際、「私はジェファソンのことを考えています」(166, 168)と言うだけでなく、「私の関心事はジェファソンなのです。この町で暮らさなくてはならないのですから」(176)と語るフレムは、ジェファソンに危険を及ぼす人物であるとしてギャヴィンが嫌悪するフレムとは相入れないものである。フレムの行動は純粹に町を思う気持ちによるものだろうか。それとも何か隠された意図があるのだろうか。

このような疑問を抱かせるのは、「我々の問題は、フレム・スノーブスを正しく評価していないことだ。初めはまったく評価しないという間違いをしでかした。次に過大評価する間違いを犯した。今は再び過小評価する過ちを犯しかけている」(175)とラトリフが語っているように、フレムは見定めることが難しく、捉えがたい人物である。発電所の真鍮をくすねるフレムは、まさにギャヴィンが思い描いたように、金銭を手に入れることしか頭にないフレム像である。しかし、フレムがジェファソンという町に関心を抱いていることを明言したとき、ラトリフは今までのフレムにはないものを感じ取っている。フレムの心の中に新たに芽生えたものを「市民としての徳(civil virtue)と呼ぶとしよう」(175)とラトリフは言う。フレムが見つけたものを、ラトリフが市民としての徳という言葉で表していることに注目すべきであろう。自己の利益しか考えていないと思われていたフレムが市民としての自覚、共同体の一員としての意識を持ち始めたというのである。フレムが模倣の対象としたド・スペインは、ジェファソンと対立したとき、「ジェファソンから逃げ出したり、ジェファソンに合うように自分を変えようとするのではなく、ジェファソンを捻じ曲げて自分に合うように」(10)した。しかし、フレムが市民の徳を見出したとすれば、自分を町に合わせようとしたと言えるのではないか。その証拠に、銀行の副頭

取であるフレムは、町の人々が考える地位にふさわしい家を、そして家具を手に入れようとしたのである。

ジェファソンの一市民であることを自覚するとともに徳を身につけたというのであるが、この言葉がフレムに用いられたことには、ある意味深さがこめられていないだろうか。というのも、“virtue”を身につけたことは、その語源である「男らしさ (manliness)」を獲得したことをうかがわせるからである。ド・スペインとユーラの不義に対してジェファソンの町の人々は、「もし夫であるスノーブスが男だったら、買わなければならないとしてもピistolを手に入れ、妻と彼女の愛人である銀行家の二人をジェファソンから排除しただろうに」(342)と考えているが、フレムがピistolを手にはすることはない。その意味では、ジェファソンの町の人々が考える男らしさをフレムは持ち合わせていない。ピistolを使えば、二人を排除することはできるかもしれないが、実質的なものは何一つ生み出さない。ジェファソンの町の人々が考える男らしさは、フレムとは無縁なものである。利益を生み出すと判断すれば躊躇なく行動に移るが、その行動が男らしいか否かはフレムの関知するところではないのである。

自分にとっての利益を考えて事を行うという点ではフレムは何一つ変わっていなくても、ラトリフはフレムをジェファソンというコンテクストで考えようとした。ラトリフがチャールズに語っているのだが、フレムは「自分の人生がなんらかの意味を持ち、あるいは心の平穩を得るために手にしなければならないものは金では買えないものであることを知った」のであり、金では買えないものとは「世間体 (respectability)」であり、それによって「銀行の副頭取ではもはや満足できなくなり、頭取にならなければならないのだ」(259)と。副頭取から頭取になることは銀行の頂点に立つことであり、ひとたび頭取になるという魅力に取りつかれると、その魅力から逃れることができなくなるというのである。

フレムが頭取になることを考えたとすれば、現在の頭取であるド・スペインを排除しなければならない。まさにラトリフが想像した通りに、フレムはド・スペイン排除に向けて行動を起こす。その切り札となるのが結婚

当初から18年間続いているド・スペインと妻ユーラの不義である。フレムはユーラと結婚することによって、「妻の道徳的墮落と恥辱だけでなく、名前もない子供という重荷を引き受け、その子に彼の名前を与え・・・その子の母親を彼女の恥辱の昔の舞台、場面、境遇から新しい環境へと移動させた」(271) ののであるが、その結果としてフレムが手にしたものはユーラとド・スペインの不義であった。しかもジェファソンの町の人々はユーラと不義を犯すド・スペインの「味方であり、盟友であった。その姦通の共犯だった」(15) というように、フレムは単に妻を寝取られた男でしかなく、ジェファソンでは孤立無援であった。しかし、フレムは18年間寝取られ男の立場に置かれていた鬱憤を晴らすかのように、乾坤一擲の反撃に出る。

ド・スペインから頭取の地位を剥奪することは、銀行の頭取でなくなるということだけには止まらない。頭取の地位を剥奪されることは、社会的な責任を取らされたということでもある。ド・スペインへの反撃は、フレムがウィル・ヴァーナーの元に届けた一枚の紙から始まった。というよりも、その時点でド・スペインの運命は終わりを告げたのである。ウィル・ヴァーナーが受けとったのはユーラの娘、リンダの遺言書であり、それには「母ユーラ・ヴァーナー・スノーブスから相続するすべてを、彼女の夫が彼女の財産から受け取る分とはまったく別個なものとして、父フレム・スノーブスに与えるものとする」(327) という内容が記されてあった。この遺言書を手にしたヴァーナーは夜も明けきらぬうちにフレンチマンズ・バンドからジェファソンにやってきた。ヴァーナーの行動は当然の行動であろう。30代半ばの健康である母親が死ぬことを想定した遺言書を娘のリンダが書いたことは、切迫した事情が生じていることを雄弁に物語っているからである。

結果としては、リンダの遺言書によってフレムは頭取の地位を手に入れることになるのであるが、この遺言書はそれ自体が奇妙ではないだろうか。この時期にユーラが死ぬことを想定した遺言書をリンダが作成したのは何故なのか、また、その遺言書をフレムがヴァーナーに渡したのはリンダの意志なのか、そしてこの間の事情をユーラは知らなかったのか等、いくつ

かの疑問が生じる。リンダがユーラの死を想定した遺言書を作成したのは、ユーラが死ぬことを知っているからではないのか。もしもユーラの死を覚悟していないとすれば、リンダの遺言書作成は非現実的なものでしかない。この遺言書が現実的な意味を持つためには、リンダがユーラの死を想定せざるをえない事情が生じていると考えるべきであろう。そこまでは想定しないまでも、少なくとも遺言書の作成にはユーラの意向が反映されていることが考えられる。なぜならばその遺言書がリンダや弁護士の手元に置かれるのではなく、フレムの手に渡り、さらにヴァーナーに届けられるとすれば、ユーラのみならずド・スペインにもただならぬ事態が生じることは火を見るよりも明らかである。とするならば、リンダが遺言書を作成した際には、フレムのみならずユーラも承知の上でのことだったのではないだろうか。もしもユーラが遺言書について知っていたとするならば、ユーラはなぜ死ぬことを選択したのだろうか。ド・スペインとの不義に決着をつけたいのであれば、フレムとともにフレンチマンズ・バンドを離れたように、ド・スペインとともにジェファソンを離れれば済むことである。しかし、ユーラはその選択をしなかった。後に残されるリンダを気遣うかのように、ギャヴィンにリンダとの結婚を誓わせて、自死へと向かったのである。

さらに、ユーラがギャヴィンにリンダとの結婚を誓わせたことに安心して自殺することも奇妙なことではないだろうか。まるでユーラがリンダを後に残すことが急遽決まったかのように思えるからである。リンダのことが心配ならば、ギャヴィンとの結婚を見届けることもできたのではないだろうか。一体、ユーラに自死を急ぐどのような理由があったのだろうか。自殺にいたるユーラの動向については特に語られていない。ということは、ユーラの身辺に目立った変化はなかったということであろう。とするならば、彼女以外の人物の意向が働いた、あるいは自殺することを強いられた可能性はないのだろうか。ほかならぬフレムの意向が。ノエル・ポークが言うように、もしも「フレムが人々に及ぼす力の源泉は、人間の本性に対する類まれなる理解」(129)にあるとするならば、ユーラに取るべき道は自殺することであると因果を含めて説き伏せたと考えることは、それほど

不自然ではないであろう。ラトリフがいみじくも指摘したように、ユーラを理解しているのは、ド・スペインやギャヴィンではなくフレムなのだから。(99)

もしもフレムがユーラに自殺を持ち掛けたとするならば、ユーラの自殺がジェファソンに対して及ぼす影響について周到な計算がなされていたはずである。ユーラは自殺することによって、ド・スペインとの関係に終止符を打つとともに、町の人々に免罪符を与えるのである。実際、ジェファソンの人々は「スノープスの奥さんの18年間の肉欲の罪を許しさえしたし、さらに自分たちが肉欲の罪を許したことによって姦通を咎めないでいた罪を許した」のである。さらにユーラはリンダを慮って「ふしだらな女ではなく、母親として自殺」(340) したと考え、ユーラを共同体の一員として受け入れるのである。人間の本性に対する類まれなる理解を示すフレムであれば、町の人々のこのような反応を予想できたであろうし、ユーラに説くこともできたのではないだろうか。

自らの命で名誉を贖ったユーラに対して、ド・スペインは「結婚の道德だけでなく、結婚の秩序を踏みにじった・・・彼は結婚という制度を二度、踏みにじったのだ。自分自身のもつとフレム・スノープスのものとを」(338) と、町の反感を買い、憎悪の対象となる。ド・スペインはユーラの葬式に顔を出したが、誰とも口をきくことなく、ジェファソンの町を後にする。このようにして、ド・スペインは銀行の頭取の地位から排除された。もしもユーラの自殺にフレムが影を落としていたとするならば、まさにフレムの思惑通りに事は運んだことになる。

ユーラは町の人々に母親として受け入れられたのであるが、それにとどまることなく、フレムはさらにユーラの物語を紡ごうとした。ユーラの記念碑を建てるというのだ。記念碑の作成にはギャヴィンが全面的にかかわった。リンダに家の中や母親の持ち物を探させ、ギャヴィンのイメージに合った写真を見つけだし、顔の部分を拡大してイタリアに送り、円形浮き彫りにして記念碑の正面に取りつけた。記念碑建立の仕事をフレムがギャヴィンに頼んだのは、「彼にとってユーラ・ヴァーナーは死んではいな

いし、死ぬことはないからだ」(348) とラトリフが推測するように、ギャヴィンであれば誠心誠意、ユーラのために思って記念碑を作ることが予測できるからだ。しかし、ラトリフが断言するように、「それはフレムの記念碑だった・・・その金を払ったのも、記念碑を最初に思いつき、計画・設計し、どれほどの大きさにするか、記念碑に何を書くか——ユーラの顔と言葉だ——を選んだのはフレムだ。そして費用については一度も口にしなかった」(349) のである。フレムはまるでギャヴィンの心中を見透かしているかのように、ギャヴィンのユーラに対する想いを尊重しつつ、記念碑を建立したのである。

記念碑にはギャヴィンが選んだユーラの顔と、フレムが用意した言葉が彫られている。ユーラの顔は「一目見たときにはユーラとはまったく似ていないと思うし、どこの誰にも似ていないと思うが、それは間違いなのだ。その顔はすべての女性に似ていないのは、似ている女性は一人しかいないからだ」(354-355) と、ギャヴィンにとってはかけがえのない女性であることが表されている。そしてフレムが用意した言葉は「ユーラ・ヴァーナー・スノープス 1889年生 1927年没 貞節な妻は夫にとっての王冠である 子供たちは立ち上がり彼女を祝福された者と呼ぶ」(355) というものである。生前のユーラがどのような人物であったにせよ、この言葉が刻まれた記念碑がある限り、ユーラは妻として理想的であり、母親としては子供に愛され、素晴らしい家庭を築いたというイメージが保持される。まさに望ましい世間体が確保されるのである。

ユーラの記念碑ができあがり、リンダもニューヨークに向けて出発し、後顧の憂いがなくなったと思われるギャヴィンであるが、実際はユーラの死を受け止めることができずにいたことが判明する。ユーラが自殺したことが納得できないでいるギャヴィンはラトリフにユーラの自殺の理由について教を請う。ラトリフの答は「彼女はうんざりしたんだ」というものであった。ギャヴィンはラトリフの解釈を受け入れ、「そうだ、彼女はうんざりしたんだ」(359) と納得して、人目を憚ることなく涙を流す。ジェファソンという共同体を歯牙にかけることなく自由奔放に生きてきたと思われ

るユーラが人生にうんざりしたとか、ふしだらな女ではなく母親として死んだと人々が考えるところでも、それは残された人々の解釈でしかない。ユーラの自殺という事実を前にして、フレムはそこに記念碑を建立するという脚色を施し、良き母親としてのイメージを作り上げたのである。フレムは全知全能の作家さながらに、ギャヴィンのみならずジェファソンの町の人々の心理を見透かし、すべてを掌中に収めているかのようである。

フレムがジェファソンの町の人々のみならず、ギャヴィンの考え方もも把握しているとすれば、フレムはギャヴィンの、そしてジェファソンの人々の想像を超えた人物ではないのか。金に執着するとしてギャヴィンはフレムを批判するが、ラトリフは「みんなフレムを誤解している。みんながだ。彼は金を尊重しているだけではない。金を敬っているのだ」(142) と、ギャヴィンや町の人々とは異なるフレム像を提示し、一定の評価を下している。ギャヴィンとラトリフのフレムに対する評価の違いは何に由来しているのだろうか。

フレムに対するイメージは主としてギャヴィンによって与えられている。しかもギャヴィンは終始、反感あるいは嫌悪感を抱きつつフレムの行動を解釈する。しかし、フレムの行動は、モンゴメリー・ウォードやI・O スノーブスを排斥したことからもうかがえるように、表面的にはジェファソンに危険をもたらすものとは思えないのである。さらに、サートリス大佐が死んで銀行の頭取を決めるときに、フレムはド・スペインに言われるままにウィル・ヴァーナーを説き伏せ、ド・スペインを頭取に、自身を副頭取にする段取りをつけたことがある。ド・スペインは不遜にも、ユーラとの関係を維持しつつ、フレムを利用するのであるが、ギャヴィンはド・スペインの言うがままに行動するフレムを「世間知らず (innocence) だった。無知ではなかった」(277) と評している。このとき、ギャヴィンはフレムを凌駕するド・スペインの厚顔無恥を指摘するとともに、世間を知らず、金銭のことしか眼中にないフレムの卑小さを述べているのであろう。このようなフレムを見る限り、ノエル・ポークが述べているように、フレムは「大方の批評家が述べているようなどうしようもなく不正直で、邪な

人間ではない」(120) と、ひとまずは見なすことができるであろう。だが、そうだとすれば、フレムの脅威を執拗に説いてきたギャヴィンの語りをどのように受け止めればいいのかのだろうか。

ギャヴィンはフレムがジェファソンに現れてから一貫して嫌悪感を抱き、ジェファソンに対する脅威を感じている。しかしながら、フレムの何がギャヴィンにそのような思いを抱かせているのかは明確には述べられていない。それはギャヴィンがフレムによって体現されるものを表す言葉を持っていないからではないのか。

フレムは、ド・スペインを頭取から追放したいと思っても「何よりも役に立つ武器、すなわち友情と言う武器を持っていなかった」(279) と述べられているように、人とのつながりを持つことがなかったし、共同体という意識もなかった。その意味では、フレムは共同体にとっての異分子であった。その異分子であったフレムが世間体を意識して行動するとき、共同体の一員という意識を持ったかのようなのである。フレムはジェファソンに深く、広く根を下ろし始める。銀行の頭取になり、着実にジェファソンに地歩を築いていくフレムに、ギャヴィンならずとも違和感は薄れていく。しかし、問題は表面に現れる行動ではなく、その行動を取る意図であり、動機である。友情や世間体を持つ必要が生じれば、躊躇なく友情を持つだろうし世間体を持つのである。そうだとするならば、フレムは何一つ変わっていない。手に入れたいものを貪欲に手に入れるのであり、そのための手段は問わないのである。

金を敬う心性がフレムの根源にあるとしたら、表面に現れた行動によって彼の評価を変えることは意味がないであろう。人間の本性について類まれなる理解を示すフレムは、自らの行動が人々にどのように受け取られるかを綿密に計算し、行動に移す時期を見定める。頭取になるためにはド・スペインを排除することが必要だと判断したならば、最適な時期と最も効果的な手段を迷うことなく選択する。そのようなコンテキストにユーラの自死を置いてみると、目的のためには人の命さえも利用することを躊躇わないフレムの非情さを見ることができるのである。しかしながら、ギャ

ヴィンのみならず、ジェファソンの人は誰一人として、フレムの冷酷さを夢想だにしなかった。フレムが望んだことは、銀行の頭取に至る道でしかなく、未だ人々の生活に直接に影響を及ぼすことはない。だが、銀行の頭取となったフレムは、人々の生殺与奪の権利を手にしたことになる。彼はすでに「実際に郡の綿経済全体の礎であり、支えである最下層の、将来の展望もない、何とか破産しないでいる一梱の小作人たちという道具、武器、手段を手中に収めている」(280) ののである。ヨクナパトーファ郡の経済基盤を担っている小作人だけでなく、経済の元締めである銀行を手にしたフレムは、郡の経済を実質的に手にしたことになる。とすれば、ギャヴィンがフレムに感じている嫌悪感、あるいは危機感とは、金融経済がフレムの恩惑を超えて社会を支配していく萌芽を感じ取っているからであろう。フレムはギャヴィンが名づけることができないうる力を体現しているがゆえに捉えがたいのではないだろうか。

Works Cited

- Brooks, Cleanth, *William Faulkner: The Yoknapatawpha Country* (Yale University Press, 1963)
- Faulkner, William, *The Town* (Random House, 1957)
- Gwynn, Frederick L. and Blotner Joseph L. eds., *Faulkner in the University: Class Conferences in the University of Virginia 1957-1958*, (A Vintage Book, 1959)
- Polk, Noel, "Faulkner and Respectability", in Doreen Fowler and Ann J. Abadie eds., *Fifty Years of Yoknapatawpha: Faulkner and Yoknapatawpha 1979* (University Press of Mississippi, 1980)
- Volpe, Edmond L., *A Reader's Guide to William Faulkner* (Farrar, Straus and Giroux, 1964)